

- \* 日野原重明さんが105歳で天に召された。父はメソヂスト教会の牧師。重明さんは神戸で筆者の父と同じ小学校の卒業生。7歳で洗礼を受けてクリスチャンになる。奥様は東京の教会で教会学校教師をしていた。医師としては勿論、多方面で活躍しておられたが、その言動の基は聖書にあった。よど号ハイジャック事件の後、自分の「いのち」を人のために使おうと決心された。
- \* 「兄弟たち、あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。」(ガラテヤ5 : 13)「自由」の反対は「束縛、制限、奴隷」などであるが、ガラテヤの信徒たちは、神々の奴隷となっていた。唯一まことの創造主を知らないで、造られた物を拝み、様々な言い伝えや迷信を守っていた。イエス・キリストを知り、それらの束縛から解放されたと思ったら、今度は割礼をすることを初め、ダヤの律法の奴隷になろうとしていた。
- \* 「自由」とは、一般的には「自分の思い通りに行動できること」である。大変良い意味に響くが、この自由をそのまま行使すると必ず「放縦」につながる。それは、人間は誰でも「罪」の性質を持ち、利己的で、悪の誘惑に弱いからである。聖書の「自由」は、逆にこの世の奴隷から、欲望の奴隷から解放されるという意味である。「私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が肉にあって生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。」(ガラテヤ2 : 20) 神であるキリストが私の内に生きて私と共に歩んで下さる時、私の魂は全く自由である。「キリストと共にある自由」と言える。クリスチャンは自己の奴隷、罪の奴隷、悪の奴隷から、キリストの奴隷になった人である。キリストの大きな愛、すべてを包み込んでしまう愛の中に自分を委ねることができるのである。
- \* 「ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。律法の全体は、『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という一語をもって全うされるのです。」(5 : 13後半~14) 信仰は神と私との関係の事柄である。しかし、信仰によって「自由」が与えられた時、その自由を大切にしまっておくのではなく、大いに用いなさい、という。それは隣人に仕えるためにである。主イエスが弟子たちの足を洗われた話(ヨハネの福音書 13 章参照)はイエスが自ら模範を示されたのである。愛とは人のことを気に掛けることから始まるが、行動で表わすことが必要である。しかし、ただのおせっかいにならないようによく考えて愛の奉仕をしたい。常に、どんな人でも自分より上に見ること、その人の必要を知ってその人のために時間を費やす、祈ることである。愛の奉仕は義務感や命令従属の気持ちではできない。私たちは、主イエスが私たちに「十字架」という最大の愛の奉仕をしてくださったことを覚えて、その恵みに生き、互いに愛し合い、仕えるものとなりたい。